

【書評】

粕谷誠著

『戦前日本のユニバーサルバンク—財閥系銀行と金融市場—』
(名古屋大学出版会 2020年11月刊)横浜国立大学大学院 国際社会科学研究院
教授 邊 英治

本書は、戦前日本のユニバーサルバンクという視点から、日本を代表する財閥系銀行である三井銀行と三菱銀行をはじめとする有力銀行を対象にして、新たな検討を行った研究書である。肝心の「ユニバーサルバンク」の定義が明示されておらず（簡単に「証券業務を…兼営する」という言及はある）、評者の方で確認すると、Cambridge Business English Dictionary において、universal banking は「当座勘定・貯蓄勘定などのフルレンジサービス及び投資アドバイス・投資商品（証券）を提供する銀行」(a situation where banks offer a full range of current accounts, savings accounts, etc., as well as investment advice and products) とある。三井銀行や三菱銀行は貯蓄銀行業務を兼営しておらず、厳密には上記の定義と合わない部分もあるといえるが、本書の中心の第Ⅱ部では、五大銀行を含む有力銀行のインベストメントバンキング業務・国際金融業務に光が当てられている。本書の帯にも「メガバンクの源流」とあり、近年のメガバンクの収益源となりつつあるこれら2つの業務のジェネシスを探ることが、本書のメインテーマであるとみてよいだろう。なお、評者はプルーデンス銀行監督史を専門としており、著者のような財閥系銀行史の専門家ではない点、予めお断りしておく。

まず、本書の構成を以下に示す（序章・終章は省略）。

第Ⅰ部 両替商から銀行へ——短期金融市場の形成

- 第1章 近世・近代における両替商の動向と銀行設立
- 第2章 為替と金融市場の展開——近世から近代へ
- 第3章 三井銀行の資金循環と季節調整——安田銀行と対比して
- 第4章 三菱銀行の資金循環と季節調整
- 第Ⅱ部 ユニバーサルバンクの証券業務と国際業務
 - 第5章 有力銀行の形成と証券・国際業務
 - 第6章 債券引受と債券市場——証券会社・地方銀行との関係を中心に
 - 第7章 国際展開と外国為替業務
- 第Ⅲ部 ユニバーサルバンクの人的資源管理
 - 第8章 三井銀行の人的資源管理
 - 第9章 三菱銀行の人的資源管理

第Ⅰ部の主なテーマは、江戸期と明治期における両替商・銀行業、金融業務の連続と断絶および明治以降の金融市場の発展である。

第1章では、大坂・江戸における両替商の盛衰を参入数と退出数という視点から検討し、銀行業との連続性について考察している。大坂では両替商の存続期間は意外に長くなかったこと、江戸でも両替商は「安定的ではなかった」ことを明らかにしている。とはいえ、大坂では鴻池や加島など存続期間の長い両替商が銀行業に参入した点に特徴があることも指摘されている。

第2章では、明治以降に手形・小切手取引が

どのように進展したか、また遠隔地為替取引と金融市場の発展について検討することで、霧見(1991)の発展を試みている。手形取引所における為替取引の仕組みは基本的に江戸期にとられていた手法をベースとする多様な金融需給にも対応するものとなっていたこと、大阪手形交換所の交換額が東京のそれより小さいのは日本銀行と横浜正金銀行の存在で説明できる(つまり伝統的な大阪の金融市場が明治以降の東京に実質的に劣っていたわけではない)ことなどが示されている。

第3章では、預金銀行化が進展した日清戦争期～第一次世界大戦期を対象に、三井銀行の資金循環を検討しており、第I部の中では最も多くのページ数が割かれている。日本銀行信用が政府金融のウエイトを増し、また年末の季節資金需要の重要性を確認した上で、1900年恐慌期における三井銀行の貸出等の推移を月次ベースで明らかにしている。あわせて、日本銀行依存からの脱却過程についても詳しくみており、三井銀行は、1900年4月に日本銀行借入依存からの脱却を宣言したが、同年6月には取付を受けて松方大蔵大臣の働きかけの下、日本銀行借入が行われたことを指摘している。本書のメインテーマとの関係では、この時期の三井銀行の経営理念が「工業化路線」を採る中上川の急逝後、「プライベートバンク」から益田の「商業銀行」と早川の「預金銀行」の対抗・折衷を経て、早川が提示した「フィナンシャー」構想に対する反論という形で、池田の「預金貸出と外国・証券業務を兼営するユニバーサルバンク」に帰着したという経緯を示している。単なる工業化路線の継承としてユニバーサルバンクへとつながったのではないことが示されたのである。

第4章では、三菱銀行(合資会社銀行部時代を含む)が日本銀行依存から脱却してコール貸金を行うようになる過程を、総勘定元帳などを利用した内部財務データからトレースしている。1912年までは製糸金融を主業とする第十九銀行の資金需要の季節性に対応するため日本銀

行信用に依存していたこと、第一次世界大戦期にはコール貸金を行う一方で日本銀行借入も同時に行っていたこと(予備的動機)、1920年代には日銀借入がなくなり大規模なコール貸金を行っていたことなどが指摘されている。さらに、五大銀行の当座貸越比率を比較し、日銀借入の減少と当座貸越比率の低下が対応していることを明らかにしている。管見の限りだが、この最後の指摘は目新しいように思われる。

なお、第I部を通読しての感想だが、著者の主張(結論)が複雑に入り組んでいることが多く(例①:第1章における大坂の両替商は銀行業に接続したと理解してよいのか、それとも断絶の面が大きいと評価するのが妥当なのか、例②:第2章における日本銀行設立の意義が重要と解釈すべきか、それとも江戸期以来の自生的な金融市場の方が重要とみるべきか)、あまり読み易いものとはいえなかった。もっとも、石井・霧見論争等をふまえて正確性を期すため、このような叙述スタイルになったのかもしれない。

第II部では、五大銀行を含む有力銀行の証券業務・国際業務の検討が中心となっている。この第II部が本書のメインテーマに即するパートである。

第5章では、預金額、店舗展開、社債引受、国際業務という4つの指標で普通銀行を対象にクラスター分析を行っている。分析の結果、預金額、社債引受、国際業務の観点からは、五大銀行を含む有力銀行が分化するのは戦間期であることを示しており、以下2つの章でその時期が主な対象となる理由を明らかにする役割を果たしている。

第6章では、まず普通銀行の公社債投資の傾向として、利鞘や自己資本比率と負の相関関係にあることおよび社債の売り捌きは証券会社に依拠していたことなどを統計的に確認した上で、三菱・住友・三井という有力引受銀行および愛知・百十・秋田の3行を対象にして、有力銀行の引受業務と投資業務の実態に迫ってい

る。検討の結果、国債についてはOTC市場も発達して双方向で活発に売買されていた一方で、債券引受については三井銀行のように証券会社などへ下引受に出して投資家に売却されるような一方向の動きにとどまっておらず、国債以外の債券の流通市場は未発達であったことが指摘されている。日本的な投資銀行業務の実態に一步接近したという意味で貴重な分析ではあるが、ユニバーサルバンクの代表例であるドイツ銀行を念頭におくと、財閥系銀行の株式投資等の実態も気になるころではあった。もっとも、1927年銀行法制定に至る金融制度調査会の議論の中で、そういった取引を主とするものは「普通銀行」とはみなさないことが確認されているのは評者も承知している。なお、三井銀行の電力業関係の社債引受については、橘川（1995）などの先行研究をどのように掘り下げているのか、もう少し説明がほしいところであった。

第7章では、普通銀行の外国為替取引について詳しい検討を行うことで、伊藤（1989）や立脇（2002）の先行研究より正確なデータを得ている。さらに、三菱・三井・住友の3行について具体的に検討し、時期尚早として商社をもたなかった住友銀行の外国為替平均額が、三菱・三井両行より1ケタも小さいこと、三井・三菱の国内店舗はアメリカ・ヨーロッパとの取引が中心だったのに対して、住友は中国・インドとの取引が多かったこと、三菱は英米日間の取引に特化気味であったのに対して、三井は取引の多角化がより進んでおり海外店舗間の取引も多かったこと、などを明らかにしている。こうした違いが生じた要因として、大商社と移民送金の有無という顧客基盤の違いが指摘されているが、三井と三菱の違いが生じた理由についての考察もほしかったころではある。

第Ⅲ部では、三井銀行（第8章）と三菱銀行（第9章）の人事政策について、かなり包括的な検討がなされている。先行研究の整理は主に労働史の視点から行われており、別の視点について評者の方で補足すると、Cassis and Teles-

ca（2018）も近年刊行され、金融エリート史の観点からも education や career paths はあらためて重要な研究論点となっている。この2つの章は、ユニバーサルバンク業務を担った人材がどのように採用され、どのように育成されていたのか、という興味深い論点に踏み込んでいるともいえよう。第Ⅲ部を通読してやや気になったのは、明らかとなった三井・三菱両行の人事慣行が、本書のメインテーマであるユニバーサルバンク固有のものか否か明快な結論が得られていない印象を受けた点である。例えば、補論を設けて、ドイツ銀行等の人事政策との簡単な比較がなされてもよかったかもしれない。もっとも、三菱銀行で証券業務と貸付業務にプラスの相関関係があったことを実証的に明らかにした点は貴重な発見であり、日本的なゼネラリスト指向を示唆しているとも解釈できる。なお、評者は金融エリート史に関する国際共同研究グループ（Financial Elites in Banking Supervision）の主メンバーであり、大銀行の人事慣行を明らかにした第Ⅲ部はかなり参考となった。評者の問題関心に即するところとはなるが、アメリカやフランスとの比較史の視点から、いわゆる“revolving doors”（中途採用者や退職者の政府関係機関との関係性）のようなケース（あまり事例数は多くないだろうが）についての検討（出向も含む）もあれば、より分析が深まったように思われる。

本書により、財閥系銀行史研究は一段と前進したことは間違いのないだろう。特に、財閥系銀行の国際業務や証券業務は蓄積が十分でない分野であり、三井文庫所蔵の三井銀行報知や有価証券売買記入帳、三菱史料館所蔵の総勘定元帳などの一次史料により検討された点は重要である。本書の副題「財閥系銀行と金融市場」に惹きつけられた読者にとって、本書はさまざまな教唆を与えるだろうと信じている。他方で、「ユニバーサルバンク」というタイトルに惹きつけられた金融システム比較史（Allen and Gale 2000, Hall and Soskice 2001など）の観点から

関心を持った読者にとっては、禁欲的な著者の姿勢もあり、もやもやとしたものが残るかもしれない。

最後に、膨大な史資料を駆使して本書を取りまとめられた著者に敬意を表したい。現在、私の知る限りだが、財閥系銀行史の若手研究者はほとんどいない状況にある。本書をきっかけに財閥系銀行史研究が再興することを期待しつつ、筆をおくこととしたい。

[参考文献]

- Allen, F., Gale, D. (2000) *Comparing Financial Systems*. Cambridge, MA: MIT Press
- Cassis, Y., Telesca, G. (2018) *Financial Elites and European Banking*. Oxford: Oxford University Press
- Hall, P.A., Soskice, D.W. (2001) *Varieties of Capitalism*. Oxford: Oxford University Press
- 伊藤正直 (1989) 『日本の対外金融と金融政策』 名古屋大学出版会
- 橘川武郎 (1995) 『日本電力業の発展と松永安左エ門』 名古屋大学出版会
- 立脇和夫 (2002) 『在日外国銀行百年史』 日本経済評論社
- 霧見誠良 (1991) 『日本信用機構の確立』 有斐閣